

# 探偵オンライン

幽霊

## 第一話 願望

僕には会いたい人物がいる。『GANJA』という名前の探偵だ。意味を調べてみた。大麻という意味。その探偵は年齢はおろか、性別も不明。どこに住んでいるのかももちろん不明で、何もかもベールに包まれている。わかっているのは『GANJA』という名称と、この世界で一番優れた探偵ということだけ。名探偵の称号を欲す僕にとって『GANJA』一つの目標と言っている。

「よお、ZEN。今日はどの事件に行く？」

話しかけてきたのは『黒犬』という名の探偵で、僕の親友だ。

「昨日は『密室』だったし、今日は別のがいいな」

黒犬はその名に反して白い肌の細身の男だ。短く刈り上げられた髪は金色で、その下に覗く瞳も水色をしている。唯一、衣服はその名に合わせてか黒で統一されている。

「だったら『嵐の山荘』なんてどうだ？　もしかしたら、俺らも殺されちゃうかもな。ははは」

そう言って朗らかに笑う。

「冗談じゃないよ。死んだら全てがおしまいだ」

僕は渋い顔をして見せた。

「その通りだな。俺もここでリセットはごめん」黒犬は肩をすくめる。「俺が言いたかったのは、リスクさ。俺たちだって、殺人事件に首を突っ込んでればいつ殺されるかわからない。その上で危険度が高い『嵐の山荘』に行こうって言うてるのか？　って話さ」

「死なないよ。絶対に」そう。少なくとも僕は絶対に死なない。「なぜなら、殺される前に犯人を見つけるからさ。何なら、僕は殺人事件を未然に食い止めて見せる」

殺人事件を起こさせない。それは『GANJA』のやり方だ。探偵界のナンバーワンがナンバーワンたる理由。事件を見通し、事件が起こる前に事件で使われるであろうトリックを予測し、その妨害を行う。それに気づかず犯行に出た犯人は自滅し、自ら犯罪者であることを名乗り出る羽目になる。

「事件を未然に防ぐとは大きく出たもんだ。出来るもんなら見せてもらいたい」

黒犬は笑う。

笑ってる。今は笑い話でも、いつか実現してやる。

「なら、お手並み拝見と行こうか。今回の事件で何人死ぬのか？　そして犯人はだれか？　犯人を捕まえるのは俺か、おまえか、はたまた別の探偵か」

「愚問だな。被害者はゼロで、犯人を特定するのは僕だ」

初めから被害者が出るつもりで事件に向かうなんて間違っている。殺されていい人間などいるはずがない。

「楽しみにしてるよ」黒犬はそう言うのと歩き出した。「行こう。事件の時間だ」

僕も黒犬の横に並び、歩き出した。

向かうは八悟岳。

そして、八悟岳のある本日の天気は大荒れ。

山奥に聳え立つその館は例のごとく金持ちの主の別荘だ。家長が亡くなり、遺言に従って親族が集められている。今夜、弁護士により遺言の内容が公開され、財産分与が行われる。殺人が起きるとすれば、この莫大な財産を巡る争いによるものだろう。

犯人が動くのが、遺言の発表の前か後かはわからないが、もう時間がないことには変わりがない。僕は早々に動くことにした。

「黒犬、俺は親族に話を聞きに行くことにするよ」

集められた人間は一〇人。そのうち探偵は三名。僕、黒犬、そして高崎弓という名の女。親族は七名で、稲塚家長男の和久、次男の静雄、長女の定恵。亡くなった家長である定治の妻、裕子。定治の弟の勝。定治の隠し子の瑞樹。そして定治の親友だという仁一。

彼らがどんな人間で、どんな闇を抱えているのかを僕は知らない。犯罪が起こる場所では、犯行に至る背景が必ずあるはずだ。僕はそれを読み解き、未然に事件を防ぐ。

「わかった。なら俺はこの館を調べてみる。わざわざこんな所に呼び出されたんだ。種も仕掛けもねーってことはないだろう」

そう言うと、黒犬は食堂を出て客室の方へと姿を消した。

僕は食堂に残る人物たちの方を調査しなくては。

それにはまず――。

「高崎さん……とお呼びすればいいですか？」

もう一人の探偵を名乗る人物。この中で唯一、親族ではない部外者。まず潰すべきは特徴的な位置づけを持つ人物だ。この手の事件で影の薄い人物が犯人ということはほとんどない。

「はじめまして。見慣れない探偵さんね。ひよつとして、新米さん？」

女は長身で、僕は見下ろされる形になる。

「新米は脱したつもりだったんですけどねえ……。その口ぶりだと、あなたはベテランなんですか？」

「そうね。ベテランの側に入るかしら」

言うと、妖艶にほほ笑んだ。

名前は日本のそれだが、金色のロングの髪に長い手足。腰の位置が高く、さらにそれを強調するようなパンツを穿いているため全身がやけに細長く見える。

「まずは目につく人間……すなわち目立つ人間を疑って見るのが捜査の定石だと思うんですけど、その点で言うとあなたは怪しさマックスですね」

親族はみな、正装を纏い、表面上はしめやかな雰囲気でも遺言の発表を待っている。

そんな中、一人だけ海外セレブかファッションモデルのような恰好をした人間がいては、否が応でも悪目立ちする。

「恰好で人を判断するなんて、探偵のすることじゃないわね」と言った後にふふふと笑う。「……なんて小言を言っても仕方ないわね。あなただって本気で私の恰好を見て怪しいとは思っていないだろうし。……それに怪しいという点で言えば、私のような恰好をしている人間よりも、あなたのように周囲に埋もれてしまおうとする人間の方がよっぽど怪しいわ。何故なら犯罪者の心理としては人の目に付くようなことは極力避けたいと思うはずだから」

一瞬だけ鋭い視線を向けられたことを僕もまた見逃さなかった。僕という人間を観察し、評価し、対応するに値するかを判断する眼。それは探偵の持つ眼だった。

「……周囲に埋もれてしまっていて、遠回しに地味って言われましたか？」

そんな意図を持ってこの恰好をしているわけではなかったので、単純にファッションセンスがないと言われたようで、少し傷つく。

「派手さに欠けるといふ点で言えば、その通りかもね」臆面もなく言って微笑む。「しかし、探偵を名乗る人間をも疑うなんて、いい視点ね」

その言葉から僕が敵ではなく、同志であると認められたことを悟る。僕もまた、一瞬見せた探偵の眼差しを信じることにした。

「何てことないですよ。単純な話です。以前、探偵を名乗っていた人間の中に犯人がいたんです。それ以来、僕は全ての人間を疑うことを覚えました」

犯人に見事に出し抜かれた苦い経験だ。あの時は僕は手も足も出せず、何人もの命を奪われ、さらに犯人の特定まで別の探偵に先を越された上、そのときにはすでに犯人は姿を晦ました後だった。

それは単純に探偵を名乗る人物は犯罪を起こさないとこの盲目的な思い込みが原因だった。

「教訓を得たのね。とても大事なことだわ」

まるで弟を諭す姉のように言う。

「今でも忘れません。犯人は『タカギ』と名乗っていた。全て事件が終わった後にわかったことですが、犯人は『レプリカ』という犯罪組織に属している人間だった」

『レプリカ』ね。『模倣』を得意とする犯罪組織で、クライム テン crime 10に入る大組織。探偵に成りすますやり方は奴らの十八番だけど、それを知らなかったことは、まだ探偵に成りたてのころにやられたのかしら」

「その通りです。まさに少し事件が解けるようになって来て、調子に乗り始めていたころ。自分の無力さを痛感させられました」

「誰もが通る道よ。大事なのはそこから何を学んだか。あなたはきちんと大切なことを学べたようね」高崎は満足げに頷くと、こちらに背を向けた。「説教臭くなったわ。……私たちが今すべきことは起こるであろう犯罪を未然に防ぐこと。次いで犯罪が起きてしまったときに備え、情報を集めておくこと。時間がないわね。せっかく色々お話しして、少しは仲良くなれた気がしたんだけど、残念、ここからはライバルよ」

「ライバルと言って頂けるんですね。負けませんよ」

高崎は言葉はなく、ニコリと笑った。

馴れ合いはおしまいにしましょう、ということだろう。

※

案の定、それぞれが悩みを抱えていて、動機の線から犯人を特定するのは難しそうだった。やれ借金やら人間関係やら権利問題やら。ありきたり過ぎて話を聞いている最中にあくびが出そうになった。どちらにしろ、こういったケースでは表面上のトラブルの水面下にドロドロとした黒い塊が潜んでいるものなのだ。それが見えてこない限り、真の動機を探し当てることはできない。

話を聞いても事件が見えて来ないならどうする？

それなら別のアプローチを考えるまでだ。

僕も食堂を出て館の中を歩く。遺言の発表が行われるのは夜の九時。今は七時過ぎなので、時間に余裕があるとは言えない。廊下を歩く黒犬の背中を見つけ、僕は声をかけた。

「何かわかったか？」

問うと、黒犬はニヤリと笑った。

「ああ、わかったよ。犯人が行おうとしている犯行の全てがね。あとは犯人を特定するだけだ」

僕は黒犬ににじり寄った。

「……どういことだ？」

「見つけたんだよ。犯人の『仕掛け』を」

「なんだって!？」

あまりにあっけなさ過ぎて、胡散臭い。

「……畏じゃないのか。こんなに簡単なわけないだろ。ミスリードに決まってる」

「ミスリードか否かは俺も断定する材料はない。けどおまえは簡単だと言うけど、俺はそうは思わない。普通の考えじゃ到底見つけることの出来ない仕掛けだし、仮にミスリードであっても、このまま放置すれば一人人間が死ぬぞ。そうすれば、ミスリードであろうとそれは事件だ。そして俺たちの目的はなんだ？ 事件を未然に防ぐことだろうか？ 今がその目標を達成するチャンスだ」

「……」僕は考える。この目の前の餌に飛びついていいものかどうかを。「……まずは話を聞いてから。それからだ」

※

客室にはそれぞれ、星座の名前が付けられている。その中でも僕が黒犬に案内されたのは「<sup>アングレス</sup>蠍座」の部屋だった。この部屋には亡くなった稲塚定治氏の長男、和久氏が使うことになっていた。

「和久氏に許可は取ったのか？」

「いや」にべもなく言った。「でも、俺たちを呼んだってことはこういうことだろ。探り回られるのが嫌なら探偵など呼ぶべきではないし、いつでもこの館から追い出したらいい。とは言っても、ボチボチ帰れなくなりそうだけだな」

窓を打つ風は、時間と共に強まっていく。嵐の山荘。すぐそこまで台風は迫ってきている。

「……いいだろう。それで、おまえが見つけた仕掛けっていうのは？」

黒犬は僕を手招きで呼ぶと、ベッドの淵に立った。

「このベッドがいったいなんでって——」

「おっと」細長い手が、僕の身体を制した。「死にたくなければこのベッドには触れない方がいい。俺も危なかったよ」

言葉に反して黒犬はベッドの端、手前の部分にゆっくり力を加えていく。すると、クツ

シヨンが沈み込み、黒犬の手と手の間から銀色の物体が顔を覗かせた。

それは、針だ。

「検証したわけじゃないが、恐らく毒針だろう」

針先からは透明な液体が流れ出てきている。

「……こんな幼稚な仕掛けで、犯人はいったい何を考えているんだよ」

直接手を下さないタイプの仕掛けはアリバイ作りによく利用される。しかし、これでは仕掛けが丸わかり過ぎて、その目的には全く用をなさない。では、いったい何を目的にこんな仕掛けで人を殺そうとしているのか？

「ただまあ、単にこれだけってわけでもなさそうだが」黒犬は身体の向きを変え、窓を指さした。「言っておくが俺は一切窓には触れてないぜ。最初からこうなってた」

言われた指の先を見ると、窓自体は閉まっているものの、鍵はかかっていなかった。すなわち、外からの出入りがいくらでも可能ということになる。

「は？ つまり犯人は窓から逃げました的な状況ってこと？」

「ああ。それで、窓の外を見てみると——」

この客室は一階で、窓の外にはキレイに整備された芝生が広がっている。しかし、その緑の中に、一つだけ明らかに人工的な物が落ちていた。

「針のついた注射筒……」

「な？ 陳腐だろ？ 窓から逃げて、凶器は捨てていきました。犯人は外部の人間で、俺たちは居もしない陰を恐れながら嵐の夜を過ぎさなければならぬ——。ふふふ、まさに嵐の山荘に相応しいネタだな」

僕は脱力して、笑う気にもなれない。

「これのどこが、普通の人には見つけられない仕掛けなんだよ。小馬鹿にしてんのかってくらい胡散臭い状況じゃないか。こんなの、小学生相手だって騙せないよ」

「トリックだけならな。つーか、トリックで呼んでいい領域に入ってすらいらないと思うけど……ふふふ。でも、このベッドの毒針だけ見りゃ、なかなかエグイぜ。知らずにベッドに腰かけた時点でアウトだからな。さっきも言ったろ？ 俺も危うかったって。ベッド探ってたら、たまたま針の頭が少し見えて、それで初めてこのベッドに仕掛けられた凶器に気づいたんだ」

「……確かに、こんな風に見えない状態で、何の前情報もないんじや、避けようがない。フツーであれば見つけることのない仕掛け……という点であれば、確かにおまえの言う通りか」

「だろ？」偶然見つけた割には黒犬は誇らしげだ。「さて、これで俺の成果発表は終了だ。代償として、おまえが聞き込みで手に入れた情報をもらおうか」

僕は食堂で聞いた一人一人の情報を黒犬に伝えた。

「なるほどねえ。確かに遺族の人間関係だけじゃ犯人の絞りようがないわな。見事に遺族同士が憎みあってる。誰が誰を殺したって不思議じゃない。しかし、こうして『蠍座』<sup>アシダカ</sup>に毒針が仕掛けられていることを考えると——すなわち和久の命を狙う人間なんて限られてくるな」

「というか、一人しかいないよ」

「ああ」

『犯人は次男の静雄だ』

僕らは声を揃えて口にした。

※

亡くなった定治氏は、数年前に社長の名を長男の和久に明け渡し、会長として自由に動き回り、会社へ利益をもたらして来たという。会社の運営から一步引くことで、時間、思考に余裕が出来、その結果として新たな事業を考え、推し進めることが可能になったのだ。定治氏は元々一代で会社を大きくした人間だ。儲け筋を見つける才が備わっていたのだから。一線を退いたつもりが、今まで以上に会社に必要な人間になっていた。

すなわちそれは、会社の責任を任された和久にとっても必要不可欠な存在であったことを示す。

対して次男の静雄は父や兄の存在を疎んでいた。

自分の能力を評価しない父や、目の上のたんこぶの兄。話を聞いた口ぶりから察するに、会社そのものにも鬱憤を抱えているようだった。そんな静雄は父の死を陰では喜んで、多額の遺産、自分を評価しない者たちの困惑、そして兄の背後に迫る失墜の二文字。けれど、ことは静雄の思うようには運ばなかった。

定治の血を色濃く受け継いだ和久は定治なしでも会社を上手く回し、会長の死に揺れる会社を見事に立ち直らせて見せた。兄は失墜するどころか、会社の人間たちから大きな信用を得た。

そして、遺産。

当たり前のように自分にも相続があると思っていた静雄だったが、今回こういった形で集められることで、考えないようにしていた最悪の事態が頭をよぎっていた。

自分への相続は、ない。

会社の運営も、家も、何もかも兄に譲って来た父だ。最期に残したものの全てを兄に託そうとするとも限らない。

そうだったら、まさに「おしまい」だ。

何もかも上手く行かない、兄に劣るという事態が静雄を苦しめ、挙句、遺産までもが持つていかれるとなっては、強硬手段に出たとしても不思議ではない。

「静雄氏を確保しよう」

僕は言った。

「ああ……いや」一度領いたものの、黒犬は思案顔になる。「だが、今は状況証拠しかない。この仕掛けだって、本当に静雄が仕掛けたものかわからない。証明できない。下手につつくと、言い逃れされる可能性だってある」

僕は地団太を踏む。

犯人の目星は付いているのに、何も出来ないなんて。

「わかった。じゃあこうしよう」黒犬は言う。「俺が静雄を見張る。おまえは和久を見張っていてくれ。容疑者とターゲット。二重で見張っておけば、まず事件を防ぐことはできるだろう。そのうえで、静雄が動くようなら奴の尻尾をつかんでやろう」

「わかった。そうしよう」

今の状況ではこれがベストに思えた。

「これで和久が殺されたら殺されたで面白いけどな」と黒犬はにししと笑う。「探偵が見張っている中の殺人。これで密室だってなったら、もっと面白いよな。探偵心がくすぐられるわ」

「おいおい、不謹慎だぞ」僕は肩をすくめた。「殺人は起こらない。絶対にだ。僕たちが起こさせない」

「冗談さ。おまえの言うとおりだ。誰も死なせずに事件を終わらせよう」

僕と黒犬の視線が交錯する。お互いに黙って頷いた。

「きつちり静雄の尻尾をつかんでやるさ」

「仮におまえが見逃したとしても和久氏は僕がきちんと守るから安心しな」

さて、そろそろ遺言の発表の時刻だ。

僕たちは食堂に戻ることにした。

※

「まさに想像したとおりだな。……今晚、きつと動くぞ」

黒犬は言った。

遺言の内容は僕らが想像した通りのものだった。

長男の和久が多く of 財産を手にし、残りの僅かな財産を妻、次男、長女、弟、隠し子で分けるというものだった。

そして、僕たちは遺言の発表以外にもう一つ、ここに親族が集められた理由を知った。

それは和久の演説にあった。

「父の遺産はお金だけじゃない。私たち親族、そして会社こそが本当に父の残した遺産なのだ。父が育てた会社を、私は守り、さらに成長させて見せる。綺麗事だけを言うつもりはない。そんな抽象的で金銭的に価値のないものに興味のない者もいるだろう。約束しよう。私に託された父の遺産を私的には使わないということ。これは稲塚の金だ。そして、この金をもっと膨らむ。大きくなった金は、この場にいる者に還元する。だから、しばらくの間だけ、私に稲塚の金を預けてくれ」

この演説を聞いて、みな納得したように頷いていた。

わざわざ親族を何か所に集めた理由。それはこうして和久の存在をみんなに認めさせ、さらに多額の遺産に対しての諍いをなくさせる目的があったのだ。

「稲塚の金を私に預けてくれ」

そう言われたら、和久のことを信用し、任せるしかない。

みなそう考えたはずだ。一人を除いて。

「あの決意表明を聞いてもまだ不満たらたらだったな。やはり、手元に入る金が少ないのが気に入らないんだろう。俺らからしたら、それでもとんでもない額だったのに。静雄のそういう即物的なところが、きつと会社で上手く立ち回れない原因の一つなんだろうな」

長男が多額の遺産を相続したとして、その長男が死ねば長男の取り分が再分配される。



静雄はそう考えているのだ。

「もうじき嵐が来る。その前に仕事を終わらせて帰らないとな」

黒犬はにっこりとほほ笑んだ。

「ああ、何とか間に合うさ」

僕たちはそれぞれの持ち場に移動した。

黒犬は静雄の部屋 // 射手座<sup>サントリス</sup> // が見張れる隣の空き室 // やぎ座<sup>カプリコーン</sup> // へと身を潜めた。

僕はと言うと、和久に出来事の全てを話、他に罠が仕掛けられていないか念入りにチェックをした上でソファで寝てもらった。

僕は椅子に座り、窓の外で吹き荒れる風を見ながら、夜を明けるのを待った。

チチチ、という雀の鳴き声が聞こえて、改めて空に目を向けると明るんできていた。

夜明けだ。

和久は生きていた。

事件は起こらなかった。

あとは黒犬が静雄の尻尾を掴んだかどうかだけだ。

僕は任務を全うした。

※

それが勘違いということに気づいたのは、朝食堂に集まってからだだった。静雄が死体で発見された。

そして、黒犬は行方を眩ませた。

※

何も言わず、高崎が僕ににじり寄る。

今まで向けられたことのない、冷たいを目をしている。

「あなた、本当に探偵？」

その問いのを受け、僕は固まってしまふ。

状況を鑑みるに、僕と黒犬は思い違いをしていたようだ。

すっかり静雄が犯人だと思ひ込み、その結果静雄を死なせてしまった。

何も言い返すことができない。

それに、黒犬が行方を晦ましている。静雄を見張っていた——言い換えれば、静雄の護衛も兼ねていた黒犬役目を果たせず、そのまま姿を見せないことを考えると、奴の身にも何かがあったと考えられる。

親族全員の視線が僕に向けられる。

「……え、あ……っ、あの……」

「ここにこうしてアホみたいに残ってるってことは、あいつと仲間ってわけじゃないわよね？ でも、したらあなたが犯罪者に手を貸した理由は何？」

「ええ……っ!？」

何を言っているのかさっぱりわからず、頭が真っ白になった。

そんな僕を見て、高崎は今度は憐れむような目になった。

「……何、あなた、ひよっとして本当に探偵として来ているの……？　にも関わらず、みすみす犯人に手を貸すようなマネをしたあげく、事件の発生を助長し、いとも簡単に取り逃がしたって言うの？」

「……あ、あのさつきから言ってることの意味がさっぱり……」

何とも情けない気持ちと、情けない声で僕はようやく言葉を発した。

「あなたの『お友達』が犯人なのよ」

「そ、そんな……ッ！」

黒犬は古くからの友達で、殺人など起こすような奴じゃない。それに、あいつだって生粋の探偵だ。絶対に犯罪になど手は染めない。

「まだわからないの？」　まるでめまいがするだけでも言いたげに額に手を当てた。「レプリカ」だったのよ。つまり、彼はあなたの『お友達』の偽物だったの！」

「まさかッ！」

僕もめまいが起きた。目の奥がジンジンと痛み、世界が回る。

「そうとしか考えられないでしょ。実際に殺人が起こり、黒犬を名乗る男は行方を晦ましていて。もし彼が『レプリカ』でなかったとしたら、それこそ、どこかで死体になってる以外にありえない。私としては、犯人にまんまと逃げられるより、そっちの方が幾分かマシな話だけどね。あなたにとっては、どちらにしろよくない話ね」

「……いったいいつの間……？」

「ここに来る前に会っていたのだとしたら、その時から。あるいは、ここに向かう途中に入れ替わったと考えるのが妥当ね。少なくとも奴らの手口を考えると、この館に集められた時にはすり替わっていた」

「そんな……。だったら、本物の黒犬はどこに……？」

「知るはずがないでしょう。私にとってはそんなことはどうでもいいことだし。けれど、まあ恐らく、他の場所と同じようにあなたに成りすました『レプリカ』の人間が事件を起こして、それに巻き込まれていると考えるのが妥当ね」

黒犬は死んでおらず、殺人に手を染めたわけでもなかった。そのことがわかり、少しだけ落ち着いた。しかし、同時に別のひんやりとした感覚が僕を包んだ。

「不覚だったわ。こんな風に一人だけ殺して、そのまま逃げてしまうなんて。人探鬼ごっこしに移行する様子もない。完全に『掛け逃げ』。本来であれば、こんなのあるえない。何の根拠もない通り魔的な犯行、探偵に考える時間を与えない即逃げ。最も低レベルな犯罪。まさか私がそんな事件に巻き込まれるなんて思ってもいなかったから……」

高崎は自分に言い聞かせるように言った。

「あなた、ここで最初に私と話した時に言ったわよね？　以前、探偵の中にレプリカの人間が混じっていて、裏をかかれた」と。そして、こうも言った。「僕は全ての人間を疑うことを覚えた」と」

僕に向き直った高崎は言った。

——これは、僕は、責められている。

この先で言われるであろう言葉を僕は知る。

そして、何も言えなくなつた。

「私は今日、あなたに『本当に探偵？』と問うたわ。それは、あなたも『レプリカ』の用意した共犯者の可能性があったから。でも、違うようね。あなたは本当に探偵としてここに来て、探偵のつもりで動いていた」

その通りだ。僕は昨日も、そして今日も探偵だ。

誰よりも探偵に憧れ、その高みを目指している。

「その上で言わせてもらうわ。あなた、本当に探偵？」

その言葉はグサリと僕の胸に突き刺さり、そして間もなく、事件を幕を下ろした。